

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 61 No. 3 2009

主幹 佐野 正之

巻頭言

専門職としての教師

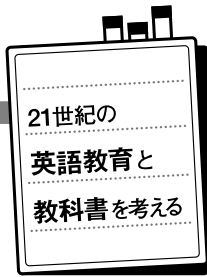
琉球大学教授 ● 大城 賢

教育界では、アンケート調査というものがよく行われる。先日、ある教育委員会から保護者に出されたアンケート調査を見る機会があった。その中には「英語教育は何年生から始めたほうがよいと思いますか？」なども含まれていた。保護者の英語教育に関する意識調査と思われるが、その内容を見て私は少し考え込んでしまった。多くの保護者が小学校1年生からの英語教育を望めば、その教育委員会は小学校1年生から英語教育を始めるのだろうか。

先日、ある小学校の授業を参観した。3年生から文字指導が行われていた。私は「どうしてこんなに早い段階から文字指導をするのですか」と尋ねた。その指導者の答えは「児童が文字を書きたがっているのです」というものであった。どれほどの数の児童が文字を書きたがっているかはともかく、児童が望むことはそのまま行われるべきなのだろうか。

私は、先日、膝が痛くなったので、近くの整形外科を訪れた。問診票に身体の状態を書き込んで診察室に向かった。医者が「どうしましたか」と聞いたので、「最近、自転車を始めたのですが、自転車に乗りすぎて膝がおかしくなったようです…」医者は私の顔と身体をじっくり診て、それから一言。「痛風かもしれません。血液検査をしましょう。」案の定、医者の言ったとおり、私は痛風を患っていた。膝の痛みは自転車とは関係がなかった。

医者も教師も、ともに専門職である。その専門的な知識と能力によって免許が与えられ、その職業に就くことが許可されている。新学期を迎え、学校現場では、これからさまざまなアンケート調査が行われることだろう。さまざまなアンケートをとおして、必要な情報を得ることは大切なことである。しかし、整形外科の医師が、患者の話聞いても、それを鵜呑みにせず、的確な診断を下したように、専門職の教師も、自らの専門的な知識によって、自らの確に判断をしていくことが求められるのではなかろうか。



「書きながら学ぶ」活動を取り入れて



広島大学教授 深澤 清治

1. はじめに

英語4技能ファミリーの中で、なぜかライティングはいつも最後に置かれています。テストにおいても最後に置かれることが多いようです。各種の学力テストを見ても、生徒にとって書くことは一番苦手のように、課題英作文や自由英作文になると、とたんに白紙の解答が返ることが多くなります。もしかすると、先生方にとって何となく指導を後回しにしてしまう技能かもしれません。

これまで、ライティングは質的に完全なものを求めるあまり、英文を構成する単語や文構造などを一生懸命「学んでから書く」と考えられてきたように思います。ライティングをとおして養成される技能は、ライティングのみに必要と言うよりは、全体としてのシステムです。そうすると、ライティングの活動をとおして他の技能にも役立つようなシステムとしての知識・技能を「書きながら学ぶ」と考えれば、少し気が楽になるのではないのでしょうか。

以下、新学習指導要領による変化を受けて、中学校英語でのライティング指導をどのように変えていけばよいかを考えてみたいと思います。

2. 新学習指導要領の改訂ポイント

昨年3月に告示された中学校の新学習指導要領によれば、平成24年度から授業時間数が週あたり4時間に増え、また指導する語彙数が1,200語程度に増えたこと以外は大きな量的変化は見られません。むしろ、小学校での外国語活動との関わりや4技能の統合、言語活動の扱いなど、質的变化に注目すべき点が多いと思われます。

さらに、高等学校の新学習指導要領では、外国語(英語)科の科目構成が全面的に改められました。「コミュニケーション英語」という用語が取り入れられた一方、「オーラル・コミュニケーション」、「リーディング」、「ライティング」など特定の技能を表す用語が消えています。これによっ

て、各技能を有機的に関連させ、バランスよく指導する統合的な英語指導推進の方向を目指していると言えるでしょう。

さらに言語活動の「書くこと」については、次の下線部の項目が新たにつけ加えられたことが注目されます。

エ 書くこと

(イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。

(途中略)

(エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。

(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

いわゆるコミュニケーション重視の流れの中で「聞く・話す」を中心に、とにかくアウトプットを求めたことから、時として正確さが不足することもありました。その反省から、特に「語と語のつながり」を明示して正しい語順で書くことの必要性が述べられています。文レベルでの理解や表現の重要性が指摘されますが、英語の苦手な生徒は、前置詞句や修飾語句を伴う名詞句のような句レベルでつまづくことが多いようです。

また、和文英訳のような情報伝達形式の質を高める作業に対して、自己表現活動では、より身近なトピックについて自分の考え(賛否など)や気持ちを述べ、さらにそれに対して理由を加えることでより主体的に関わり、言語に対する意識・感覚を育てていこうというねらいがあります。

続く「文と文のつながり」を意識させることは、まとまった内容を持ち、全体として一貫性のある文章を書けることをねらったものです。文章中の個々の文の形式上のつながり、および意味上のつながりについて注意を払わせる意味で、ライティングの理論にも合致した流れと言えます。

3. これからのライティング指導

このように新学習指導要領では言語活動の指導事項について改善が図られ、特に書くことについては全体的な再編成が見られます。これをもとに、これからのライティング指導に求められる原則のいくつかを考えてみようと思います。

(1) 読み手を意識する

伝統的に英作文指導において、生徒が書いた英文を読むのは常に授業担当の先生でした。一般に、教師が生徒の書いたものを読むときには、内容よりも生徒の間違いが目につきやすく、訂正のための形式的フィードバックが主体になってしまいます。書き手としては、誰かがそれを読んで反応を返してくれることを期待するものです。そこで、生徒同士で書かせ、相互にコメントし合うことによって読み手を意識させることで、書く意欲を高めることができるでしょう。

(2) 場面・状況を明確に

英作文をする際に、読み手を意識すると同様にどんな場面・状況で書くのかを生徒が十分に把握している必要があります。つまり、誰に対して、何をどう、どのくらい書くのかをはっきりさせておくことです。そうしないと、例えば「自分の住む町の紹介」や「家族の紹介」などのテーマも、無関係な内容が並ぶだけで、文と文のつながりがない文章になってしまったりする可能性があります。さらに、目標となる表現や文構造だけが気になって、「書くこと＝文法の時間」という意識が定着してしまうこともあるからです。

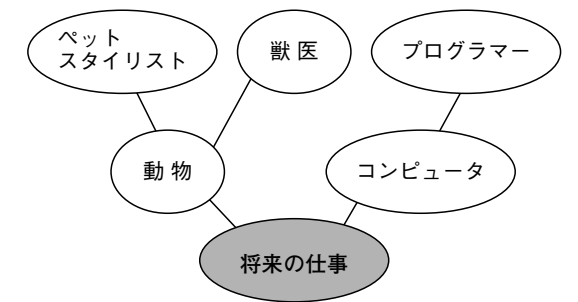
(3) タスクとしてのライティング

最近の第二言語教育において、タスク(課題)という用語をよく目にします。いろんな考え方を含むものですが、概ね意味中心の活動であること、目標達成型の活動であること、ニーズにもとづく現実的な活動であること、などの特徴があります。例えば「買い物リストを作る」などのタスクでは、何を買うかという意味内容中心、なぜ・どこでそれを買うかといった現実的な目的・判断・理由づけなど、を含みます。なぜこれを選ぶのかといった根拠を考えたり、賛成・反対意見を考えたりするなど、考える作業も含みます。

4. 移行措置期間に取り組みたいこと

授業時間が増加しているのに指導内容がほとんど増加していないということは、時間をかけて言語材料の定着を図り、アウトプットを増やして言語活動を充実していくことが目標となります。移行措置期間には、そのための足場づくりをしたいものです。

例えば、現行版SUNSHINE(開隆堂)の2年生、Program 6の課末、Let's Communicate, Speaking and Writing Tasksにおいて、「将来の仕事」について発表する課題があります。例文では、①なりたいたいもの、②その理由、③夢を叶えるためにすべきこと、を書くことになっています。その前に、トピックについてできるだけ多くのアイデアを出させるマッピングを取り入れて、何を書くかを考えさせることができます。



さらに職業名が英語で言えない場合は、辞書を引く前に、よりやさしい英語で言い表す練習をさせることもできます。例えば「獣医」はveterinarianでなくても「病気の動物を治療する人」(someone who sees sick animals)で書き換えることもできます。また、次の例のように、日本語的な日本語を、英語に直しやすい日本語に変換する過程を考えさせることもできます。

(例)「今朝は息が白い」(日本語的な文)
→「今朝は(寒いので)息が白く(見える)」(英語に直しやすい日本語)
→It is so cold this morning that I can see my breath.(より自然な英語)

書く過程の指導に時間をかけることは、結局はよいライティングにつながります。「書きながら学ぶ」ことで、少しでも多くの生徒が“Writing is fun!”と思うようにしたいものです。

「英作文」で力を伸ばす!

岩手県盛岡市立下橋中学校教諭 鈴木 泉



1. はじめに

生徒の学習事項を定着させ、学力を総合的に伸ばすために、1年生の頃から徹底して「読む」「書く」を重視した指導を行ってきた。本稿ではその中でも「英作文」指導を取り上げたいと思う。

2. 「読む」「書く」重視の指導

(1) 授業の中での「書く」活動

生徒が英語を input し、さらに output できるように、授業のさまざまな場面で「書く」活動を取り入れている。

例えば、warm-upでのQ-A活動。授業はいつも固定したペアによる活動を取り入れているが、既習の英語を用い、パートナーと互いに質問をし、答えたら、英文を「書く」という形で、活動と活動の間に空白の時間を作らないようにしている。

また新出文法事項については、それを用いた英文を書く練習を行っている。「語順並べ替え」→「和文英訳」→「自己表現英作文」のような形で、スモールステップを踏んで練習をしている。

(2) 「視写ノート」を用いた活動

また英語の input には、「音読・視写」も効果的である。1年生で英文を導入してから、この2つを徹底して継続させている。

ノートは「予習用」「視写用」の2冊を全員に持たせ、授業の中でも家庭学習でも、「視写用」ノートを使って視写を行えるようにしている。

授業で視写をさせる場合は、教科書1ページあたりの文字数から書き終える目標タイムを定め、タイマーを使って時間を計りながら書かせている。目標は、たくさんの英文を「速く正確に書ける」ようになること。そのためにも、「1文を見て1文を書く」ことを意識させている。

(3) 課題英作文による output 活動

日常の指導の中で計画的に組み込んでいるのが課題英作文である。次の表のような形で、それぞれの学年に目標を定め、その目標に沿った課題英作文を実施している。

学年	目標	英作文
1	自分や周囲の人を紹介できる	・自己紹介 ・家族・友だち紹介 ・学校紹介 ・自分の1日 ・手紙文
2	教科書を読み、感想・意見を伝えることができる	・日記 ・E-mail ・自分の町 ・自分の好きなもの ・感想文 ・要約文
3	さまざまなトピックについて考え、意見のやりとりができる	・日記 ・要約文 ・詩 ・日本文化紹介 ・日本と欧米文化の比較 ・意見文「途上国の子」 ・意見文「戦争」 ・意見文「携帯電話」 ・好きな人物レポート ・意見文「幸せとは」

3. 実践例「日本とアメリカの文化の違い」

(1) 活動のねらい

外国語学習の目標の1つに「異文化に対する理解を深める」ということがある。言語が用いられる背景にある文化や習慣などの違いを理解しないことには、本当の意味でその言語を使いこなせないからである。本時ではアメリカに限定し、日本と異なる生活習慣、そしてそこから起こりうるトラブルについて生徒が調べ、英語にまとめた。

(2) 活動の進め方

①事前の宿題

週末に「日本とアメリカの文化の違いで『困ること』『トラブルになること』を考え、調べよう」という宿題を出し、具体的な場面とともにインターネットや書籍で調べ、まとめてくるよう指示した。

②本時の活動

宿題で調べたことを用い、文化の違いから起こる「トラブル」を英作文する活動を行った。

事前に指導した留意点は、次の4点である。

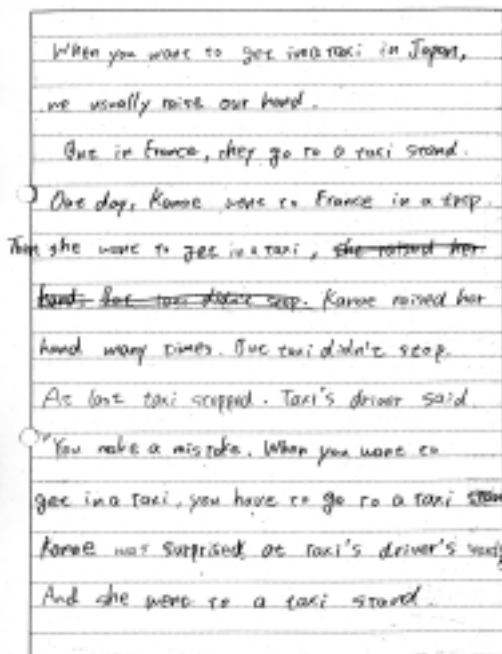
- ア. テーマに基づき、「場面」を考えよう
- イ. 5W1Hを考え、話を組み立てよう
- ウ. わからない語句は辞典で調べよう
- エ. 困ったらペアで助け合おう

そして授業の大半、約35分間を使って、生徒が自分のレポートを作成した。英作文が完成した後、生徒に指示しているのは次の3つである。

- ア. 作文の見直しと自己添削
- イ. ペアで交換し、相互添削と相互評価
- ウ. 自己評価

その後で集め、1枚1枚読み、評価する。評価は細かな文法のミスをチェックするよりも、「場面が明確にわかる英文であるか」「語と語・文と文とのつながりを意識した英文であるか」を見るようにしている。

〈生徒のレポート作品例〉



③事後指導(添削指導)

次時の活動。生徒が書いたレポートから数点をTPにし、OHPで映して指導する。

「どういう内容か」「どこがよい表現か」「どこを直せばもっとよい文章になるか」を生徒に考え

させ、その後指導をする。それによって「よりよい」英文とはどういうものなのかを学ぶ機会となっている。

4. 「よいモデル」の提示

生徒が英文を書けるようになるには、「よい英文を書こう」とするmotivationを高めることが大切と考える。そのために日常的に生徒がお互いの作品を見ることができるようになっている。

例えば、廊下に「英語作品展示コーナー」を設け、生徒の英作文レポートを綴じたファイルを置き、いつでも誰でも見ることができるようになっている。

また優れた作品数点は、コピーしたものを模造紙に貼り、展示コーナーに掲示している。作品を掲示された生徒は素直に喜んでいる。また生徒は仲間が書いた優れた作品を読むことによって、「よい英文の書き方」を学んでいる。

5. おわりに

現在受け持っている3年生が、昨年春に行ったNRT(標準学力検査)の結果は下の表のとおりである。

	聞く	話す	読む	書く	計
本校3年	80.7	75.3	83.3	71.2	77.6
全国平均	62.5	61.5	66.7	53.1	61.0

入学時から「読む」「書く」重視の指導を行ってきたことにより、生徒は確実に力を伸ばしてきた。NRTの結果からも「読む」「書く」だけでなく、「聞く」「話す」を含めた4技能がバランスよく伸びたことがわかる。

幼児の言語習得過程を考えると、親からの言葉を「聞く」、次にそれをまねて「話す」、やがて文字を覚えて「読む」「書く」をくり返し行う。小学校低学年の国語では、「音読・視写」を何度も行っている。

英語学習も同じと考える。教師の英語を「聞く」、仲間と「話す」、そして「読む」「書く」を何度も行うことは言語習得上、理にかなっているのではないか。

今後も学習事項の定着と、学力向上のために工夫した指導をしていきたい。

中1 家庭学習のシステム化を目指して

東京都品川区立小中一貫校日野学園教諭 岡崎 伸一



1. はじめに

久しぶりに中学1年生を担当することになった。英語学習の入門期のため、「この1年間で今後の英語学習に対する姿勢が決まる」、「勉強自体が苦手でも好きな教科は英語と言わせたい」との思いでスタートした。

私は東京都の公的研修である東京教師道場の部員であった。そこででの助言を受ける中で、「若い先生方は、家庭学習の課題の量が少ない」との指摘を受けた。

日常語である日本語ですら、実は言語習得のための作業が毎日くり返されている。日常語ではない(場合がほとんどである)英語では、授業以外にも英語に触れ、学習する機会を持たせて基礎・基本の定着を図り、その忘却を防ぎ、これを継続させることで学習習慣を形成させたいと考える。

2. 何を家庭学習の課題にするか

教科書に関係するもので、継続的行った課題を具体的に列挙してみる。

- ①英単語ビンゴ
- ②復習としての教科書音読(音読5回で☆を1つ描く)
- ③音読チェックシート
- ④基礎徹底ワークシート
- ⑤Writing Notebook

3. 各取り組みの流れ

上述の①～⑤について、実際にどのように行っているのかを述べていく。使用している教科書はSUNSHINE(開隆堂)である。

①英単語ビンゴ

教科書内容を扱う前に、「うす～く」単語導入をするためにビンゴを行っている。教材はLet's Enjoy "BINGO" (浜島書店)を使用している。未習語を書かせることが疑問視されるのは理解している。だが、ここで単語を視写させる意味合いは、小文字を書く練習程度だろう。中2、中3ともなれば

自分で読もうとする力もつくので、中1のような意味合いとは異なってくると考える。また、自校は45分授業であり、この活動はウォーミングアップとしてテンポよくやりたい意図もある。よって家庭学習で準備をさせている。

②復習としての教科書音読

授業で教科書内容をOral Introduction(またはInteraction)し、内容を理解させた後、音読練習をしている。家庭学習としては、5回音読したら☆を1つ描かせることにしている(武蔵野大学、長勝彦先生の実践)。「次の授業までに☆を～個」と指示したりするが、基本的に定期テストまでに☆10個を目標としている。各生徒に教科書準拠のCDを持たせているので、音源を頼りに音読練習をすることも認めている。「年度終了時には教科書を☆でいっぱいにしよう」と常に声をかけている。

③音読チェックシート

☆がたくさん描いてあっても時間が経てば、すらすら音読できなくなってしまうことが見られた。ごく少数だが、英文にカタカナをふっている生徒もいる。そこで、「音読チェックシート」を作成した。1課につき2回提出させている。

そこには、「ア.音読を聞いてもらった相手3名(保護者,同じクラスの生徒,違うクラスの生徒)のサイン」、「イ.その相手からの一言」、「ウ.聞いてもらった自分の感想」を書かせている。たまたま偽造サインが発見されるが、2、3度は騙されてあげることもある。続くようであれば注意することもある。保護者からの一言を読むと好意的なものもあり、興味深い。

④基礎徹底ワークシート

教科書内容を指導した後、該当する課について



指導書付属教材の『基礎徹底ワークシート』を課題としている。この教材の特長は、順番に進めていくと前の設問が後ろの設問のヒントとなるように、各設問が有機的に関連していることである。初出語にカタカナがふってある配慮もありがたい。まさに、英語が苦手な生徒にやさしいワークシートである。

この課題にはルールを設けている。それは、絶対に左上から順番どおりに取り組むことである。理由は各設問が「有機的に関連している」からだ。Let's Sayのコーナーでは10回は音読することを指定し、Let's Writeの「3回ずつ言って…」を5回に変えることもある。

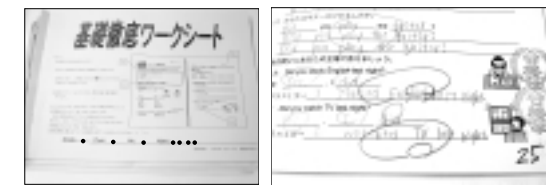
この課題の提出の流れは、以下のとおりである。

- ア. 配付された日の翌朝(1時間目の開始前)を提出期限として英語係が回収する。
- イ. 私が空き時間に丸つけをし、ミスがない場合には「合格」印を押す。ミスがあった場合には赤で下線のみ書いて指摘し、「再」と記して学年の配付棚に入れる。
- ウ. 生徒は訂正したら「再提出箱」に入れる。
- エ. よければ「OK」印を押し返却する。ダメならば、また「再々」となり、「OK」になるまでくり返す。
- オ. 生徒はチェックシートに課題が済んでいることを確認できるように書き込む。
- カ. 教科書の裏表紙に貼付した「スタンプ確認し表」にスタンプポイントをチェックしていく。



教科書指導を2学期で一度終えたので、このワークシートもすべて一度は取り組んだことになる。そこで、再度同じものを冊子にして、冬休みの課題とした。その際、Let's Writeの大問3(基本文を応用して英文を書く設問)で、さらに「+1文」を書かせることを課題とした。生徒は返却済みのシートを参照し、各自丸つけまでをすることになっており、私はこの「+1文」の部分だけを確認す

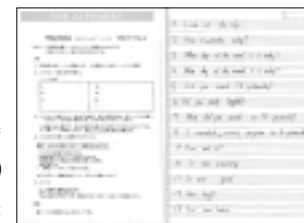
るようにした。これもまた、上述のエをくり返すことになるのは同じである。



⑤Writing Notebook

中1であるため copying をさせている。先輩教師から教わったように「ア.ねらい」、「イ.やり方」、「ウ.ルール」などを記した紙をノート最初のページに貼付させる。

書く英文の原則は、「自分が発音できて、意味のわかる文」である。1文ごとに通し番号をつけて視写していく。3学期から始めたが、中1のうちにまずは1,000を目標とした。アメとムチで詰めていきたいと思う(1月末の時点で早い生徒は300文程度)。今後の成果が楽しみである。



4. 最後の1割をどうするか

上述の①～⑤は、①→②→③→④→⑤のように有機的に関連するように意識している。そのシステムを生徒に理解させることが課題に取り組む姿勢を形成する要素の1つであるとも考える。だが、いくら詰めてもできない生徒もいる。声をかけて励まし続けながらも、時には短時間でも居残りさせるなど、アメとムチを使い分け、「生徒一人ひとりを大切に」心で接していくしかないと思う。でも、道のりはまだまだ長い…。

5. おわりに

以上、教科書に関係する家庭での学習課題について平成20年度にやってきたことを述べた。もちろん改善点などもあるだろうが、何かの参考になれば幸いである。

多くの先生方が目指しているのは、生徒が自ら考えて、家庭で自学自習する姿だろう。平成20年度は「自学」の機会が少なかったため、21年度は徐々に自学システムづくりを目指していきたい。

“学び”を支援するタスク活動

元 広島県尾道市立長江中学校教諭 佐々木 久美子



1. はじめに

日頃から授業で大切にしていることは「生徒の学びをいかに成立させるか」である。具体的には、教師の「教えたいもの」を生徒の「学びたいもの」にするにはどうすればよいかを考えて授業づくりに取り組んでいる。ここでは教科書SUNSHINE(開隆堂)の3年生、Program 7でのタスク活動を取り入れた授業実践をとおして、生徒の学びの支援と学習内容の定着に向けた授業のあり方について考えてみたい。

2. 生徒の学びとタスク活動

タスク活動は、課題の解決を軸として展開される学習活動である。課題設定を適切に行うことによって、「教えたいもの」が「学びたいもの」へと転化し、生徒は主体的に学習に取り組むようになる。その結果、基本的な知識とその活用の仕方を効果的に習得させることができる。生徒はタスクを達成する過程で表現を自分のものとし、それを活用する力を身につけていく。また、その過程で班やペアでの協同学習を工夫することにより、その学びを深めることができる。深い学びは強い印象となって生徒の心に残り、学習の定着に向けての大きな力になると考えている。

3. 授業でのタスク活動

(1) 導入時

導入は新しい表現との出会いの場である。そこで、学校の先生などの身近な人や自分たちの住んでいる場所に関する話題をスキットにしての関係代名詞や不定詞の導入、ジェスチャーを使った進行形の導入など、日常での活用を意識した自然な場面設定と楽しい授業空間を心がけている。

また、同時に、導入そのものをリスニングタスクとすることによって、生徒が興味・関心を持って本時の課題となる表現に自ら気づき、それが習

得への意欲につながるように考えている。

(2) 文法事項等の習得

習得すべき文法事項等を使って、できるだけ自由度が高い表現活動をさせるようにしている。

例えば、関係代名詞 who の学習では、タスクを「長江中学校の先生について who を使って説明してみよう」とした。その結果、Ms.~ is a teacher who always says, “I am pretty.” など、生徒は教師の特徴をとらえて意欲的に表現した。

また、関係代名詞 which の学習では、動物クイズを使って導入し、タスクを「which を使って動物クイズを作ろう」と設定した。全部異なる動物カードを各班(4人)に渡し、クイズ作りをさせた。各自が1つの動物を担当するので、一人ひとりが責任を持って取り組んだ。「モグラ」は This is an animal which lives in the ground. 「カメレオン」は This is an animal which has a long tongue. と表現していた。班対抗の動物当てクイズとしたので、生徒は班で相談し合い、実際にクイズの出題や応答をとおして、which の使い方を楽しく、効果的に習得した。

(3) 本文の内容理解

本文理解のためには、内容を理解させる「質問」をタスク化することが求められる。その際、本文に書かれている重要事項について課題を設定することは当然であるが、それだけでなく本文には直接書かれていない、文脈等から推測させるような課題の設定も大切である。

例えば、本文中の Thank you. という表現を取り上げて、「ここでは主人公はどういう気持ちで言ったのですか」と質問する。また、I know how you feel. という表現では、「なぜ気持ちがわかるのですか」と質問する。こうしたタスクを通じて、本文のより確かな内容理解が可能になると考えている。

(4) 単元で習得したことの活用

「単元の終わりにどんな力をつけていきたいか」という視点に立って設定するのが「ゴールタスク」である。Program 7の単元の終わりでは、「新しいALTの先生に尾道の名所や観光地を紹介しよう」というゴールタスクを設定した。生徒は Senkoji Park is a place which is famous for cherry blossoms. など、関係代名詞 which を適切に使って紹介文を書いていた。

そのときの授業過程は次のとおりである。

導入	黒板に貼ってある複数の写真(金閣寺、東京タワー、ピザ、ラーメンなど)について、関係代名詞 which を使ってペアで説明させる。
展開	①本時のねらいの「ゴールタスク」を提示する。 ②2種類のモデルとなる尾道紹介の手紙文を教師が読み上げる。 ③紹介文を書く手順を質問によって確認する。 ④2種類の紹介文を比較しながら、よりよい紹介文にするためにはどのような工夫が考えられるか確認する。 ⑤紹介文をワークシートに書かせながら個別支援をする。 ⑥完成した紹介文を各班内で読み合わせる。 ⑦改めて、自分の紹介文を訂正させたり、加筆させたりする。
まとめ	家庭学習の課題として、反復練習のための課題と発展的課題の2種類を提示する。

4. 家庭学習へつなぐ

授業を家庭学習へ効果的にリンクさせることができれば、生徒の学びに継続性を持たせることができる。先の授業の最後に、次のような家庭学習のタスク(課題)を提示した。

「次回の授業では、実際にALTの先生に自分が説明した手紙を読んで手渡します。家で次の2つの課題のどちらかを選んでやってみてください。①発音、イントネーションなどをくり返し練習する、②さらに詳しく説明したいと思う人は1文でも2文でもつけ加えてみる。」

家庭学習課題は大きく2つに分けられる。1つは基礎・基本の定着を図る課題で、もう1つは発展的な課題である。また、学習課題を出すとき、

次の3点が重要であると考えている。①生徒が言語の使用場面を具体的にイメージできる、②生徒自身が必要とする課題を選ぶことができる、③課題に取り組んだ結果、自分の英語の活用力がついたという達成感が得られる。

次の授業で生徒の様子はどうかであったか。クラスで英語が最も苦手の生徒が「ちゃんと読む練習してきたよ。聞いて」と言うので、その読みを聞くと、日頃の彼の読みに比べて数段すらすら読んでいる。いつも宿題を忘れるその生徒が家庭学習でしっかりと読みの反復学習をしていた。発音の不安が常にあり、「これ、どう読むのですか」とよく質問する生徒も、その日は自分自身で練習しながらALTに紹介する順番を待っている。また、英語の得意な生徒は自分なりに文をつけ加え、さらに暗唱に挑戦していた。全員が自分の紹介したい場所をALTに伝え、ALTからの質問に答え、そして紹介文をALTに渡して授業は終わった。いつもは、誰かが家庭学習課題を忘れ、忘れた生徒に対して授業中に注意することがしばしばである。しかし、この授業では、ALTに尾道を紹介する活動に向けて、全員が自分で選んだ課題に意欲的に取り組み、授業に臨んでいた。

5. おわりに

この授業実践を通じて、タスク活動が授業での生徒の学びを変えるだけでなく、家庭学習への効果的な学びの継続を可能にすることに気づくことができた。それは本当の意味で、学んだことの定着につながると考えている。本年度は授業のさまざまな場面で、生徒の“学習活動のタスク化”を試み、家庭学習課題の出し方の工夫をしていきたい。そのために、自らの教材研究を深くし、生徒の“学び”の定着のための努力を続けていくつもりである。

参考文献

中嶋洋一 Tips for Everyday Classes 『STEP英語情報』2008 7・8月号 日本英語検定協会
高島英幸(2005)『英語のタスク活動とタスク』大修館書店



定着を目指したwarm-up活動

北海道砂川市立石山中学校教諭 前田 喜久子



1. はじめに

数年前、まだ私が教師に成りたてのときです。自分自身の授業にどこか行き詰まりを感じ、運よく巡ってきた田尻悟郎先生(関西大学教授)の講演会に参加しました。すべてが非常に興味深いお話でしたが、その中でも特に印象に残ったのが「大切なことは授業の中でいかに生徒がGet Familiarするための時間をとれるかなんだ」という言葉でした。それから私はいかに「楽しく定着」させるかに力点を置く授業づくりを目指してきました。今回は特に効果的だった活動の1つ、warm-upの時間を使った活動を紹介します。

2. warm-upの年間計画

例として1年生のwarm-upの年間計画をあげます。

4, 5月	Short Talk① 自己紹介と簡単な質問
6, 7月	楽しい歌で単語定着
8, 9月	疑問文とその答え方
10, 11月	教科書本文の単語定着
12, 1月	Short Talk② 相手に聞き返す
2, 3月	疑問文とその答え方 Short Talk③ 1年のまとめ

warm-upとして行ううえで気をつけなければならないのが、①短時間で行える、②テンポがよく、英語学習のリズムを作る、③動きがあり、口や体が軽くなる、といった活動であることです。今回は特に1年生の1学期に行う2つの内容について紹介します。

(1) 初めてのShort Talk (4, 5月)

入学したてのこの時期には英語を話す楽しさを感じることを、授業のルールを教えること、いろいろな友人と触れ合うことをさせたいものです。まずは簡単な自己紹介の文をペアで伝え合うことから始めます。Short Talkの約束である、①大きな声ではっきりと、②相手の目を見て、③日本語は使わない、④ビッグスマイル!、を生徒と確認してから始めます。授業ごとに必ず新しい文や課題を

増やしていくようにすると、誰にとっても毎回新たなチャレンジになり、今まで取り組んだ文も何度もくり返すことができます。1文ずつ増えるので生徒は無理なく練習でき、最後には「こんなに長い会話ができるようになったんだ!」という自信にもなります。普段は黒板にセンテンスカードを貼って進め、最後にまとめのプリントを配って復習できるようにします。

(2) 音楽を使った単語の定着(6, 7月)

この時期には数字、月、曜日などを覚えてもらいます。すぐに覚えてしまう生徒がいる一方で、なかなか覚えられない生徒もいますが、だからといって「各自覚えてきなさい」では酷な話です。みんなが飽きないで練習するためには、音楽の活用が一番です。よくある曜日などの歌で、なるべくテンポがよく、少し難しい曲を選びます。毎日くり返すと誰でも自然に口ずさめるようになりますし、そのうち廊下で生徒たちの歌う声が聞こえてくるようになります。

その他に使うものは同じリズムを刻んだアップテンポな曲です。私は音楽好きの同僚に頼んでオリジナルのものを作ってもらいました。これは単調になりがちな単語を読んで覚える練習を、楽しくチャレンジなものにしてくれます。また、テンポに合わせて単語を読むことをこの時期に染み込ませることによって、その後もリズムのある授業を展開しやすくなります。

3. おわりに

もちろんここで述べたこと以外にも英語学習に必要な要素は多く、時間はいくらあっても足りないものです。限られた時間の中でいかに効率よく「楽しく定着」させることができるか、そのために一番大切なことは授業の至るところで教師自身がリズムを感じていることだと思っています。自身の次の重点はoutput段階で、いかに「覚えてよかった」と感じさせる課題を用意するかです。まだまだ未熟者教師、これからもがんばります。



私の授業実践報告

—英単語のイメージを探ろう—

静岡県静岡市立観山中学校教諭 村谷 泰治



1. はじめに

英語の授業には、コミュニケーションを図ること、ことばを追求すること、異文化に親しむことなど、さまざまなおもしろさがあります。今回は過去5年間の私の授業実践の中から、1年生のことばを追求する授業の一部をご紹介します。

2. 私の授業実践

①イメージするっておもしろい

授業者がおもしろいと感じたさまざまな英単語のイメージをALTとのスキットやクイズで紹介。

(例)「彼は鼻が高い」と言うときの「高い」は、どんな単語を使うのだろうか?

He has a (high, big, tall, long) nose.

大学からゲストスピーカーを招き、英単語からさまざまなことがイメージできることを紹介。

(例) Eric Carleの絵本THE VERY HUNGRY CATERPILLARを使ってthroughのイメージを紹介。On Monday he ate through one apple. と On Monday he ate one apple. を比較し、throughのある・なしによってリンゴの食べ方のイメージが異なることを説明。

子どもたちは英単語のイメージを探ることにより、そのことばを使用している英語話者の発想にも触れ、題材のおもしろさを感じていました。

②単語について調べよう

子どもたちは、自分が興味を持った単語について、英和辞典、和英辞典、簡単な英英辞典、英語表現に関する書籍、ウェブサイトなどで調べてきました。授業者は、子どもたちが十分な追求活動ができるように、できるかぎり異なった種類の辞書や専門書を用意しました。

(子どもたちが追求した単語)

funny, interesting, exciting / big, large / small, little / on, over, above / under, below / save, help, assist / see, look at, watch / speak, talk, say, tell / trip, travel / home, houseなど

③プレゼンテーションの工夫をしよう

授業者は「自分が創り上げた英単語のイメージを、簡単な英語で伝え合う活動をしよう」となげかけました。子どもたちは試行錯誤しながらも、自分で英文を作るおもしろさや、プレゼンテーションを工夫するおもしろさを味わっていました。

(例)テーマ: help, assist, save を使い分けよう。

(子どもたちが創り上げた英単語のイメージ)
help: 同等な仕事, 立場で助けてもらうイメージ
assist: 上下関係があり, 人の下で働くイメージ
save: 命を救う, 大切なものを守るイメージ

(子どもたちが考えたプレゼンテーション)

Hello, everyone. We will show you a skit. Look and listen.
Tomio is a student. Yusuke is Tomio's mother. Today, Tomio has a lot of homework. They are at home.

A: What's the matter, Tomio?

B: I can't finish my homework.

A: Can I help you?

B: Oh, really? Thank you.

C: Can you understand the word "help"?

We will show you second skit about "assist." Yusuke is a TV director. Tomio is his assistant director.

A: Tomio, please bring that chair for me.

B: O.K.

A: Tomio, please bring that desk for me.

B: Sure.

A: You assisted me. Thank you.

C: Can you understand the word "assist"?

We will show you third skit about "save". Tomio is in a fire now. Yusuke is Spiderman. Tomio is in danger.

A: Help me. Help me.

B: Are you O.K.? Are you O.K.? Tomio, let's go outside.

C: Spiderman saved Tomio's life. Can you understand the word "save"?

We will ask you a question. Please choose the best answer.

No.1 I assist his life. No.2 I help his life.

No.3 I save his life.

The best answer is No.3.(生徒原文のまま)

④単語のイメージを伝え合おう

プレゼンテーションは、1グループ5分で行い、ALTにはNative Speakerの立場から自分の意見を言ってもらいました。クラス全体で自由に英単語のイメージを語り合い、英語ということばの持つおもしろさを共有することができました。

第57回 中村英語教育賞入選論文発表

第1位：該当者なし

第2位：The Value of Dictogloss for Japanese Senior High School Students

神奈川県立有馬高等学校 甲斐 順

分詞構文の表現効果・使用レジスター研究に基づく授業実践

～分詞構文は高校でどう取り扱われるべきか～

大分県立安心院高等学校 渡辺 真一

第3位：The Effect of Shadowing with Different Text Level on Listening Proficiency

秋田県立横手清陵学院高等学校 濱田 陽

◆ 審査員 ◆

佐野 正之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授)

山岡俊比古(同副委員長・兵庫教育大学教授)

白畑 知彦(静岡大学教授)

高梨 芳郎(福岡教育大学教授)

萬谷 隆一(北海道教育大学札幌校教授)

論文審査にあたって

審査委員長 佐野 正之

今回で実に57回を数える、全国的に知名度の高い伝統ある「中村英語教育賞」に、合わせて6件の労作が寄せられ、審査員一同非常に嬉しく審査にあたることができましたことをご報告し、厚くお礼申し上げます。

自由題を含めて4種類の課題に対して、高等学校教諭6名のご応募をいただきました。どの論文も力作揃いで、審査は難航いたしました。最終的には、上位3点を選出することができました。

審査にあたりましては、5名の審査員が慎重に審査し、その結果を踏まえて総合的な観点から委員長と副委員長との間で最終審査を行いました。その結果、上記3点の入選作を決定いたしました。審査基準につきましては、従来からの5つの観点、独創性・発想力、内容の充実度、構成力、表現力、応用性・実用性から審査を行いました。

入選作の講評などについては次号に掲載いたします。ご期待ください。

連載 小学校で英語が始まった!

第3回

これからの中学校英語の役割を考える



北海道教育大学札幌校教授 萬谷 隆一

小学校英語活動を受けて、これからの中学校英語が果たすべき役割とは何なのでしょう。いくつかのヒントを示したいと思います。

●学習モードの移行支援

小学校英語活動では、あそびや体験の学習が主ですが、中学校英語では、「努力して達成する」という要素が出てきます。「あそび・体験的活動」が先行することは悪くないのですが、地道な努力と練習への耐性を育てるうえで懸念がないわけではありません。中学校英語では、学習モードが突然変化しないように、小学校の実態を知り、特に1年生の授業方法を工夫する配慮が必要です。

●言葉を整え、整理する

中学校英語で大切なのは、「通じればよい」という傾向がある小学校英語に慣れてきた子どもたちに、文法や表現の正確さの大切さをいかに納得させるかということです。そのヒントは、1つには、これまで以上に目的感を重視して、タスク達成のために表現形式を正しく学ぶ必要感を高めることです。もう1つは「子どもの英語表現」から「大人の英語表現」への脱皮を促すことでしょう。いつまでも「通じればよい」では、言いたいことを細やかに表現できず、稚拙なままであることを生徒に理解させる必要があります。

●項目学習から規則学習へ

小学校英語活動は、単語やフレーズをそのまま覚える「項目学習」が主体です。中学校英語では、徐々に「規則学習」の要素が出てきます。この規則学習は、中学生の発達段階でこそ有効になるもので、中学校英語の重要な役割です。小学校で「まるごと」覚えてきた表現を、中学校英語で新たに文法という視点から再認識するという「帰納的な気づき」を伴った学習の機会をより多く与えるべきです。とりわけタスクの事後における自発的な気づきを誘発するような問いかけや振り返りの工夫が必要です。

また、文法や表現形式への気づきを促すうえで、文字の役割も重要です。文字によって文法は可視化され意識化が容易になります。さらに文字により、小学校でまるごと覚えた表現は、初めて単語に

「分節」して意識されます。

●4技能の統合

小学校英語では話す(S)、聞く(L)が中心ですが、中学校の学習指導要領は、読み(R)、書き(W)を含めた4技能の指導の充実を唱えています。そのため、まず小学校での音声の基礎を文字に移行すべく、十分に音読に習熟させること、さらには、R→S(読んで言う)、L→W(聞いて書く、メモをとる)など、音声と文字のスキルを統合させる練習が重要です。

●「小学校で既に行った活動」の扱い

従来中学校で行われてきた自己紹介や道案内、買い物等の活動は、小学校でも行われてきます。このような「デジャヴ活動」に対して生徒は、「つまらない」という反応を示す可能性がある一方で、「以前やったことあるからやさしい」とかえって意欲的に取り組む可能性もあります。中学校英語では、生徒の反応を見きわめつつ、少しステップアップした要素を加味する配慮が必要です。

●談話展開力の充実

小学校英語活動では、例えばWhere do you want to go?という質問に対して、Brazilなど、単発のやりとりになる傾向があります。中学校では、ぜひ「対話を深める」力を高める努力が必要です。例えば上の会話では、Why?という質問を続け、相手がBecause I want to practice soccer there.と答えるなど話題を深めることが可能です。小学校英語では難しい、プラスαの談話展開力を目指してほしいと思います。

●より豊かな自己表現と理解への招待

中学校で、体験の学習から本格的な言語学習にシフトすることはたいへん穏当なことなのですが、一方で、体験重視の小学校英語では大切にされる「目的感」が希薄になる傾向があります。それゆえ、中学校英語では、中学生らしい自己表現活動や発展的プロジェクトなど、外国語を学ぶ意味を感じられる授業を目指していただきたいと思います。

今回は、小学校と中学校が連携した取り組みの例と小中の橋渡しのあり方について考えます。

語彙サイズ強化に向けての試論

—辞書と疑似リスニング—

京都文教中・高等学校教諭 平井 正朗

1. 「紙」の辞書と電子辞書の“antinomy”という現実

筆者は「紙」の辞書の携帯を必須としているが、実態はと言えば、電子辞書が主流である(入学してくる生徒はなぜか全員持っている)。担当するクラスの生徒全員に聞いてみたところ、電子辞書はコンパクトで軽いという意見に加えて、最も印象的だったのは「紙」の辞書は自宅学習という“制約のない時間”の中で「じっくり読み」、電子辞書は授業という“制約のある時間”の中で「素早く引く」という“辞書観”であった。さらに「じっくり読む」の意図するところを掘り下げて聞くと、例えば未知の動詞があれば、まず文型を考えた後、自動詞か他動詞かを判断し、例文を参照しながら英文のジャンルと文脈から意味を確定するそうである。その点で実践している辞書指導の効果が少しは出ていると納得できるものの、実際の授業で“キーをたたく姿”を見ると、電子辞書を活用して英語教育に資するものはないかと考えざるを得ない。

2. リスニング雑感

大学入試に対応できる受験指導という“現実との妥協”の中で、センター試験やAO入試へのリスニング導入とあいまって「どのようにしたらリスニングができるようになりますか」という質問が多くなってきた。筆者の場合、「音聞き取る」スキルに加えて、「音声情報を聞き分け、短期記憶に保存する」スキルが必要であるということを生徒向けの言葉に代えて答えることにしている。前者はいわゆる“英語のシャワーを浴びる”ことによって習熟するものであるが、後者は心的辞書(メンタル・レキシコン)における語彙情報を活用して

適切な意味にアクセスし、イメージマップを描くトレーニングが要求される。その際、個々の背景知識をベースに、トピックに必要な情報をスキミングして会話の場面や登場人物の役割や心的状況を推測しつつ、ストーリーの展開を予測し、ポイントを整理しなければならない。最終的には生徒が個々に目的意識を明確にし、それぞれが自宅学習という“制約のない”時間の中で学習を進めてもらわなければならないのだが、その動機づけとして50分という“制約のある”授業の中で何らかの取り組みが必要だと思われる。

3. 具体的な取り組み

授業では音読を指導の柱の1つにしている。しかし、担当している生徒を見てみると、音読しないというよりも音読する学習ストラテジーが身につけていないというのが実感である。コミュニケーション能力養成のフローチャートであるinput→intake→outputを顕在化させ、英語の音声に対する“苦手意識”を取り除き、少しでも大学入試に相乗効果を生む指導の一助として次のような取り組みを行っている。

(1) 予習段階

授業で扱った読解素材からキーワード(もしくは重要と思われる)英単語3つとその説明文を電子辞書に内蔵された英英辞典で調べてノートに筆写してくるよう指示しておく。キーワードとなる語は通例、名詞が多いが、ここでは品詞は問わず、自分が重要だと思った語を自由に選択させることにしている。高学年になるほど大学入試の過去問や平常の単語テスト用の単語帳、英字新聞を活用するケースが増えるが、授業内で文脈の背景知識を付与したものなら何でもよいことにしている。

(2) 実践

- ①週2回、授業の最初の5分間にペアワークを行う。週2回という回数はほどよい刺激となり、飽きることもないようである。ただし、状況に応じて、夏期休暇中の進学講習期間など90分授業の場合は毎日10分にしたり、朝のSHやLHを活用することもある。
- ②一人の生徒が自分で調べてきた英単語1つの説明文を英語で音読する。音読は2回を原則とするが、英文が長くて未習の単語が含まれることもあるため chunking してゆっくり読む(chunk については高1段階で指導しておく)。
- ③相手が音読する英文を shadowing し、日本語に要約して応答した後、該当する単語を発音してノートに筆写する(高2後半くらいから日本語に要約するのではなく、dictation してから該当する単語をノートに書かせることもある)。
- ④答え合わせをした後、順番を入れ換え、今度は自分が調べてきた単語の説明文を音読し、相手が日本語に要約、該当する単語をノートに筆写する。5分間それをくり返し、互いに問題を出し合うが、間違えた単語は自分の専用ノートに書き取っておき、学校にいる間に自分の電子辞書でその単語と説明文のスプリングを確認しておく。
- ⑤家に帰ってから間違えた単語と説明文の音読を20回ずつくり返す。さらに「紙」の辞書を引き直し、その単語に付箋をつけ、1週間後、もしくは定期考査前に見直すという作業を習慣化する。教師は役割モデル(role model)であり、机間指導等を通じて supporter に徹するが、生徒の到達度には常に目を配り、プラスイメージの“褒め言葉”をかけ、やる気をそがないようにする配慮が必要である。

4. むすび

生徒の反応を見ていると、好評のようである。休み時間や昼休みなどに取り組む生徒が増えているのは好ましい光景である。以下に生徒の「声」

を総括してまとめに代える。

- ・ペアワークによる学習は短時間であるが、自らが参加するものだけに楽しいし、5教科7科目の厳しい受験勉強を“癒して”くれる。
- ・2～3か月も続けていると単語・構文小テストの得点がかかなり上がるだけでなく、英語学習に対する motivation が高まる。
- ・教科書の単元で自分が重要だと思っていた語をペアワークで相手が選んだ語と比較することによって、ストーリーや筆者の主張に対するとらえ方、感じ方の違いがわかり、トピックに対する興味が深まる。
- ・電子辞書にある英英辞典のリスニングはいわば速読練習にもつながり、聞き取りだけでなく、語彙サイズ、構文力強化にも役立つ。
- ・英単語の説明文の音読や dictation は思った以上に頭に残り、“借文”しやすく、口頭での“瞬間”英作文に役立つ。
- ・授業で扱った大学入試の過去問や英字新聞から重要語句を選択し、dictation することは英作文に有益である。また、評論文のジャンル別のキーワード発見や背景知識の強化にも直結する。
- ・音読の際の chunking, shadowing, そして日本語要約はリスニングに役立つ。また、自分の読み方もだんだん速くなってきていると思う。
- ・間違えた単語の専用ノート書き取りと自分の電子辞書での再確認は英語全体の定着率を高める。また、単語テストアレルギーもだいぶなくなってきた。
- ・自宅での音読20回と「紙」の辞書での確認、テスト前の見直しは定期考査だけでなく、模試の偏差値にもはっきり数値として現れてきた。
- ・リスニングの集中度が高まり、OCI でネイティブの英語を聞き取りやすくなった。また、話そうと思ってもなかなか口をついて出てこなかった英語が、たどたどしくではあっても滑らかになってきた。

語彙指導をどうすべきか

例年、新学期が近づくと業者からサンプルとして『〇〇単』が送られてくる。最近の基本・発展・応用編、CD付、文脈重視のもの、などさまざまで、一括購入して授業で「単語テスト」をすることが「語彙指導」と思われているフシもある。

Graded Readers などとの併用により、語彙を暗記することの動機を引き出すことで、うまく機能しているケースもあるのかもしれないが、筆者にかぎって言えば、週3時間の授業は前時の復習と本時の新教材の導入、説明・音読などで手一杯で、そのうえさらに「単語テスト」などする時間的余裕はない。

確かに語彙の習得は重要で、言語学者の千野栄一(1986)も「ある外国語を習得」しようと思えば「まず、何はともあれ、やみくもに千の単語を覚えることが必要である」と述べている。筆者の体験でも、英語を学び始めてある時期までは、語彙不足から文章の途中でモヤがかかり文意が追えなくなっていたのが、語彙が増えるにつれ、何とか最後まで読み通すことができ、概要がつかめる段階になって英語学習が楽しく感じられたことを覚えている。したがって、学習者に語彙習得を意識づけ、サポートしていくことは大切である。

では、通常の授業の中で、語彙指導を行うにはどうしたらよいか。新語を覚えるのは、新たな知り合いを覚えるのと同じで、何度も会おううちにその特色もわかり、なじんでくる。とはいえ、最初の出会いがインパクトのあるものであれば、それだけ記憶にも残りやすいだろう。筆者の場合は、新教材の導入をOral Introductionで行っているのだから、新語は(すべてではないが)まず、実物提示なり、文脈を利用しながら既出の英語で言い換えたりして提示する。例えば、Are We Alone in the Universe? (*Unicorn English Course I*, L.8) という課では、初めにスピルバーグの映画 *E.T.* が引き合いに出される。そこで、筆者が *E.T.* の下手な絵を黒板に描き、以下のような展開になる。

T: What is this?

S1: E.T....?

T: Yes. What does E.T. stand for?

S2: ??

T: Well, it stands for "extraterrestrial."
"Extra" means "outside" and "terre" means "the earth," so E.T. is a living thing outside the earth. Repeat after me, "extraterrestrial." (以下略)

音声もなく辞書で引き、「地球外生物」と理解するよりは数段インパクトがあるのではないだろうか。

この後、本文を黙読する際も、筆者の場合は配付したプリントに語彙の注釈があり、*extraterrestrial <extra (= outside) + terre (= the earth) のように示してもあるので、耳で聞き逃した学習者も再度確認することができ、多くの者にとっては2度目の出会いとなる。

次の授業の復習では、前時の本文の空所つきサマリーを配付し、キーワード的な語を入れさせる。既出の語は文脈から当然わかるので単に()にしておき、前回の新出語は頭文字だけヒントに出しておく。例えば(e)のように。学習者にとっては3度目の出会いとなり、相当なじんできており、定着もしてくる。

まとめると、1)口頭導入→2)本文プリント→3)復習サマリーの3段階を通じ、一貫して文脈を伴って新語に触れさせるよう心がけており、この利点は本文の流れで覚えるので記憶に残りやすいこと、また前後の単語との関係で覚えるため、コロケーションの理解も深まることである。

結局のところ、筆者にとって、語彙指導とは独立したものではなく、日頃の授業の一環でなされるべきもの、という認識なのである。もちろん、学習者が個々にそれぞれのレベルに応じて必修単語集を利用することを否定するつもりはない。

(筑波大学附属駒場中・高等学校教諭 八宮 孝夫)

参考文献

千野栄一(1986)『外国語上達法』岩波書店

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、9月、2010年1月、3月、5月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を呈呈いたします。